

## 田沼期の金銭相場と銭貨政策

慶応義塾大学（非常勤） 藤井典子

江戸時代の銭貨は、常時鑄造されていたわけではない。勘定所が必要と判断した時期に「銭座」を開設して銭貨を鑄造し、あるタイミング停止した。しかし、どのような判断材料をもとに、銭貨政策の意思決定・執行を行ったかの実態は、よくわかっていない。

その一例が、田沼期（本稿では、1758年から1786年を対象とする）である。この時期の貨幣政策については、計数銀貨の嚆矢である明和南鐮二朱銀の発行（1772年）が注目されてきたが、銭貨についても、真鍮四文銭の発行や、商人請負制による銭座運営を廃し、勘定所の指揮管理下で金座・銀座などが運営する体制に移行した画期であった。しかし、銭貨は明和南鐮二朱銀と同種の「小額貨幣」として論じられがちで、銭貨政策に焦点を絞った分析は手薄であった。

江戸や幕領の関東農村部では、藩札が発行されておらず、18世紀半ばごろ、人々が授受した貨幣の多くが銭貨であったといっても過言ではない。1文・4文の銭貨で多額の支払いをするには重量が嵩み不便な面もあった。こうした面に対処しうる明和南鐮二朱銀が発行されたが、その農村部への普及実態や銭貨との代替関係、金銭相場への影響等が実証されないまま、田沼期後半の銭安進行と鑄銭持続の事実が提示されてきた。1970年代から進展した研究では、上方の銀銭相場の時系列分析や貨幣数量の推計値等を論拠に、金1分未満の「小額貨幣」需要へ対応した一環として銭貨増発の動きが意義付けられてきた（新保・岩橋ほか）。しかし、相場の動きと施策を整合的に理解しきれない局面があり、銭貨政策の意義については再検討の余地がある。近年利用可能となった銭座関係史料や農村史料等も活用し、田沼期を通じた銭貨政策の検討・実施過程を再検討し、幕府のスタンスの変化とその背景となる政治的事情や経済情勢等について事実関係を把握する基礎作業が必要と思われる。

本稿では、以下の構成で論を進める。①金銭相場に関する制度や先行研究を簡単に振り返ったうえで、1765年に開設された鑄銭定座の運営体制について新史料をもとに分析し、鉄一文銭の銭両替向けの払出や幕府御蔵への納銭時に勘定所役人や金座人らが相場をいかに把握管理していたかを明らかにする。②江戸市中で形成された金銭相場に加え、関東農村部の金銭相場を年貢関係史料等から新たに捕捉しその推移を観察する。③相場データをもとに、田沼期の銭貨政策の局面を5つの時期に分け、幕府関係者が各局面でどのような課題に対処しようとしたかを史料から分析する。その際には、政治的要請や経済振興策の遂行といった要素も勘案しながら、実際の銭貨の用途の事例をもとに実証を進める。

こうした銭貨政策の意思決定・執行過程の実務を辿ることを通じ、田沼期の経済政策・政治の特徴の一端を映し出すことを試みる。

[ここに入力]